繪本烈戰功記

J3
2257
9

池清

門へ遠13
2257
巻9

繪本烈戰功記巻之九

目録

謙信攻臼井城事
上杉家之勇士与松田戰于陣門圍城兵追越後勢事
松田孫太郎怪力之図
長尾政景溺死之事
宇佐美定行餐應政景圍宇佐美家斷絶之事

174

會本烈戰功記卷之九

謙信攻臼井城事

成田長安剃髮除衣の身と成り本末越後國へ聞えざりきとふよりと上杉謙信ゑ此ことを聞き只先より手領惣盃尾より長安攻寄せ一味を憑む。月武ゆゑ手出し。其の城と攻落し て。一時に成田を手元へうんと。已に陸奥の沙汰もありきと知て下總國臼井の惣主原式部太輔と云ふ將手柴國胤の親族に而所領多保。武威隣國に震ひきるゆゑ。小笠原氏に合体して。遂に下總一國攻併呑申。此時越後へも聞えるとうんど形勢あり。頻に云繁て。越後の國民皆きんもあーと聞えきれだ。謙信先恐の体攻を國意

で。臼井の城より遣はせ。敵の根割所あんどとて。太田英徳
入乃三郎と先陣と定め。中方英俊守盤長。掃部和泉守系
家。彩発田因幡守治附其外惡小僧孫太郎。越上郡衆
竹俣參河守為。其勢都合八千余騎にて。永禄七年春三月
春日山を雷発有て。總足へとて押出る。臼井の城將原式
部太輔い。越足へ出るゆと。良准備とゆの処。却て謙信へ押
よ寄らる。大へ用意して。急ぎ相足へ羽檄所飛し。先て曰上
杉謙信。自逆兵を率て寄来られは。対。係の陣戦頗難儀と
覚へい間。何卒れ加勢をなるべしと。援兵を乞る。市きう也
きれば。氏安仲宥ゆて。雪臣松田孫太郎に八百余騎と陳て
加勢しして臼井へぞ送るを。彩て上杉輝虎公謙信

175

を。猛虎の山所裂勢ひして。臼井の城近く押寄る。山岩第山
の禁小陣と取て。短兵急に攻結んとて猛勢ちるふ。味兵自相
警る怖れ。未戦いざるふ早。陣ぎ敵の色をあらいしるる。孫ふ
白井入道しるる軍配の達人ゆて。弓箭修行と号。備國
所廻歴して。所々乃四司領主の客と成て。兵法と授乃ゆ
打しも總足へ来。少條の援兵。松田孫太郎と陣第のちゆみ
有とゆ。臼井の城中へ陣ひきれば。味方式紋お捕大ふ
悦び。今度謙信の絆先と陣の衆所乞きれば。白井入道
早速へ仲緒して。夫夜大へ社檀へ上り。はるか天文と仰ぎ
寄まの陣とくとゆ中して曰上杉謙信大軍と率て寄らるる
いくとも。聊も怖ずゆ。故の陣上ふ立るる気い何も殺

氣ふるひて因者より消。味方の城上乾の気。是律気ふるひて王相
消ど。雖活戦ふ所へ味方の猪利必定なり。將来城中
ふ立ちまん。大山を猶よ為ひめく平。くるかる所の淡斎
しまれば。今迄気所座したる武勇お補と。長陸士
卒よりるまで。ひとみをとるべといふ事なり。天晴越兵
寄来るべ。粉の如よ付崩さんと。勇氣日以よ十倍しく
責る所逢と付ふ。明まば三月廿三日。越方の先鋒。太田
英法入乃三乗。八百余持て押出せば。次て本庄柳崎が
勢。陽よ進ふ来る。両と堂と揚や居。兵一ふ三乗ふ乗れんと
息をもつがず攻よ寄ふ。城中よりも矢石を発し。厳しく
防ぎ遮ふ。申の刻よ至て寄手世ふ引もとる。

大義。小守市兵衛。八百余猪て歩て出。同よ猪と投へ舞直よ
孤立迫戸ふ成と引。暫息と次べ。赤松空水平山又郎。八百余
掩殺ふ。寄手の先鋒太田三乗戦ひ疲ふ。備所新左
衛門ふ。越前守整長下知と出て。掩ひ来りたる城兵よ刻
ての。暫戦ひ引退く所城兵大よ勇をふ。寄手乃ふ逆亂
ふるで。連よ迫まくれと。両と仇て突戸し。本庄ぶ猛勢と迫付
来れ。三百騎。本庄整長大よ怒て。る左進て踏止り。両槍
所ふく出先よりみ。迫くふ城兵と突付。ふと磨て血戦
ふ。是をこて始よ退て太田三乗。小笠原丘より紅ぐ駆下る。
の横合より孤立まべ。をしも勇し。赤松ぶ勢。四反路ふ駆て
乱きふ。城中の一將。平山又郎。孤立ふ下知をふ。血戦

走て働けども。寄手の勢烈火のごとく攻るよ手強く。
死とこんぜる処よ。系ヶ家老。佐久間彼後。少輔の援兵松田
孫太郎。一千余騎よ。突出しく。本庄太田ヶ勝俗る猛勢の
生出中く。忽しもく。孤入。千変万化よ孤ちや彼し。雖多寡
多紙手破。平山を敵て接戦を。中よ松田孫太郎。朱ちを足
に金の物ゑを飾とる紙者し。弓角手たる甲をいかき
ゑき。跨よ手跨り。彼方ぞれ大長刀を。
四郎。掲本十郎の勇士紙。左右よ左。味方の先よ進み
太田ヶ勇兵八騎紙。羅辰ると始て。本庄。彼後の兵士
と対。半数紙。己よ亂軍し成しよう。長刀を枠者よ
ゑを。捏の本よ織入る捧を手振。騎る歩立の

四方八面よ羅例せば。三陸の彼後勢も老ヶ為よ手崩され。孫伝
乃徳本にてゑれうゑふと。松田佐久間平山ヶ勢。須彼や
故を級下ヶたるで。大将孫伝紙。元く弓名せよと呼ゑりく
入山の崩ヶごくよ。彼ヶ旅本ゆ孤入んとゑ石よ。旅本
彼の指紙左右へ和ゑを。忠草城の曽よ孫の前の弟左手く
中紙弟ゑる同生左の武者二騎。徒紙引提て陣頭よ衝上
孤入んとゑる城兵を。忽十六騎突て落し。絵引ゑりて遊ゑ
其ゑ後二王の霊場紙守護して山門よ左ゑるヶ如しごとの
味兵氣紙呑まて。進ゑる四ヶ方ヶ。
松田孫太郎大よ。
どと生一文字よ孤対。彼武者此二も動ヶ。莞尓とく

178

上杉家の勇士松田と陣門戦ふ図

狂衛立さう。松田雷の如き勢ひ発。彼何ものぞ名乗さく
松田孫太郎が一揉とおめかれよと呼さう形ぐら付さかろ紙
彼の二猪可良くと咲ひ保嵐雲兼而奇よも聞たらんふ越の
鬼小鴉孫太郎。鉄上野之介孫太郎。松田が揉とひら
つとかたしく。あ方より突ふと。松田いまれと戦ともも
せど。右よ左よ排ひ。撃法些も怯まずして。形後よ廻て
戦ふさう。二人の勇士い何辛しく。松田を生捕んと巴の字よ廻て
さう出て。続先緩急自在ふ有らくども。撃ま廻て廻しう
ちて。猪を付方の逃ろ方ゆきぶ。ろと激しく組伏んと。
別さ何く向うんとあ不白日已よ西山よ没し。天曇り風紀く
雲掩ひ暗さう。廻天も暗ろ形ぐ。見兵ちく左右へ立

別れく。松田も勢ひ強く。城中くと引うさる
城兵退越後勢本
明ぬ三月廿四日。陣中よ昨日乃一戦よ者ま此大軍退崩
てさう。ろ。ろ。勇ろ。武将謙信怖ろふ。今日こと集で
付とくんと。疾突出んど形勢ろて。勇立さうんえさると。白井
八道大よ制し。昨日の一戦味方此勝利と。見謙
信の筭策よて。寡よ味方此傷利よ。生故い今日ハ見十倍日
うて軍勢先んぞる附ハ必負の日也。謙信是勢ぞ故ふ慈と吐
に負色とうんせて。十分味方よ驕らせ。今朝早く。歩て出勢
待。斧付を役。味方の兵士を疊ふして。一附よ城勢寄ろんと
必勝を指さる術ぞ。此日の寄手此使といひ。引の

自在聞しに擒りし謙信の智謀の怖しさよと名高き山本
道鬼も。此手にてぞ討死なしつれ。小國の猛將と四海に轟きし
宜なり。然れバ此入道。城中に在ん限りハ年ら彼が謀計
に乗られん。此一戰にて最大事にぞ候へすれ。城を謙信に
渡しと思ハれなバ。此入道が意に随ひ。言が発る
近に必ず突出あるべからんと。解きをしぬれバ。諸兵一同に舌を巻
恐怖して。己が持口を堅固に守てぞ居たりける。寄手の陸奥ら
大将謙信は。時日が考にて。時日数に色を付至られバ。今日ハ勇く
打て出てしと。計策が擒て疑ちるとけれども。城中靜爾として
突出るべき気色も見えざりけれバ。不審に思ひ黄昏伏鬪が
物換すをなしけるに。在飯て田此城中より。白井入道といへる者

居て。今日ハ悪日なりとて。城兵を制し而軍が出さんとせん
ともと告るぞ。謙信大に驚き。備を立てける。白井入道。世に聞えたる
軍配の者なり。斯る曲者籠に陥て在りと云ひ。さるにても我
計略を推察するの小城踏潰ん事致さ
縁ども。味方の損亡多きをいとふが。先囲を解きて暫し有て
良將空が仰居たりしが。節を拍て膝き。陸に寛て天変
あらん。速に陸が掛るべしと。諸奉行に令が下る。されども。偵写に
打跨り。陸門まで進られける処に。一天俄にかき曇りて暴
風地を捲。大雨盆を傾るが如く。霹靂頭上に轟きて。面を上る者
あるなく。大地に伏て怖れさんとも。謙信此上にも座せんとして
陸門より顧て大音に曰。諸軍早に續て速に引れよ。天変

己より迫りたり。松明の者疾くそよろめき拵て一撃加へ給へ
のがれく柔出し。稍妻の頻り使ふ。給をもえんぐと砲られ
れきぐ。今こそ近寄て戦兵も。方よ変じ大将の弩を持。故こそ
あるべしと。中庭柳崎を始。各術策を合せ一隊ぐみより猛出き
ど。孟雲空より充満して勝ち勝ち赤後を分て進。倫の松明を
ふ。玉烈風暴雨の中を除り。我先と引纏ふ。不側今
近縄信の陣処と定し伐よ。後の片山瓦落くと崩墜ふ山の如き
大石磐落て引後る。戦後劣数十人微塵ふ砕うきそで失ふ
る。城中より内井入る。大よの櫓ふ座而。寄手の陣を瞰もぐ
ふ〳〵と立しぶ。常下に面く。衝ち上り。城中ふ引ぐくだるふ
大意所数し。今こそ味方勝利の付るふ。山岡とぐ

討く出よ。進や人〳〵進と軍弧囲扇を振く。常立く躍きれば
待受る松田孫太郎。赤松大義。平山八郎。赤松空水。千外 悼中
究竟の勇士。我先〳〵と突出し。松明の光に囲まれ迫寄引纏
越兵より刺く人。丑こ毎こより突崩し。斬ち跳ちて働きれで
戦兵数より紋走して。討る者数所。縄信を迫め中庭
柳崎等ふ良表く引取。太田こ乗殿して有るふ。大ふ怒り大迫
しふ付散さんと。切知ふ一同ふ。堂と喚く。孤立
て除来る大勢より。但牛ふ守して。狂蛮ふ手崩され
右往左往より敗走こ。松田孫太郎ふ例の槍持手振く。太田う
兵士ふ手石羅例し。烈風大勢ふ乗じて。猛烈よ傷きれ
ぐ。縄信ふ仕ふ命ふ中所を引ぐ。退寄牛

ぞんぜ齒嚼をなして立てりけるが。太田三楽が兄弟。此小僧。謙信
が代りに立よし。走り寄くるの尾筒を引掴て止とや
せ引とれをと。三楽振かへりまつりてんきば。七天人鐘の御優
兵頬髭逆に立けるが。大地にして手を握天を射。彼朱の足
に懸る金物。松明の光にかゞやきて凄まじさ。その三楽鐙
が消有無の答に及ばずして西く嘆と飛あつて。遠ざかりて
迯出し。雑兵に立すぎてぞ逃をなる。是をとんく太田が耳目
とたのみをなる大倉大学。未方が無事に引さんとて。太刀
が出向にぞくし。松田がからげて切るを。松田底も是が
かはして。対へよとさんとしが。太刀持る臂を引組で大地
嘆と引居首掻切て是よりて。敵兵是をとんで戦慄

兼て聞岩峯山に赤鬼住と。味方寒に陸を離し山が嵐と恐り
て斬魁食ありと。心に懸立足が空にぞ逃行る。松田は十分に
勝利を得て。敵の持する兵器を拾せて。徐々と引返しけれ
共晴勇の働ありし是よりして松田が鬼孫太と異名を呼ける
也ければ嗚呼此挙に白井へ居合ざりせば。謙信の寄付に諂城を
一時に陥落して。士卒八首足を異にせんと。白井の軍配不時の天変
有りしも猛勇の謙信が追討剽数勝付れど上に兵器を捨て
十分の勝利を得る事。誠に東武に一太浦幸運なりしとふべし
寄手も又謙信にて莫る川せん。牟兆孫を機を知んや。今守時の蹄
がつて怒怪巌の為に屠しん。然すしが松田が一挑兆ると為るなんど
流石の謙信。天変の気なるを察して。暴風驟雨の為に達

183

に亦ぬけらきゝ。亦人間業こんあるべきもの。見聞者。誠よ
味方も感激して。止ぞり者の
長尾政景溺死之事
上杉謙信臼井の城を寒ぬぐして飯田有まるが。再度兵をとりて
攻寄んとて。軍慮巧をまさるべの所よ。越国不震の頃こそ通出せ
事如何ともよ。伝聞上田の博士。長尾越前守政景隠謀を企
謙信他出の間を示知。越後巧侵攻せんと。准備もありと聞
きこえあり。きれば。謙信大よ猛。先政景巧征せんとして。出
宮辺。兵数ホの長尾集め。密よ計謀あるべしと。鬼ホ有元
徴一変せばして。図らず。時の巧。
越前守政景と。謙信の従兄ホして。長上郡河綾の方巧

要られど。事皆謙信の上よ立て。剛毒双の猛将なれば。若き謙信
の下知とも。ものを使ふべき四ひる知よ。先年村田合戦の退ホ。謙信
数よ。ふんとせきをを焼金蓋。長越の懐巧ホ。
ホ見ホ。ホ平。新叛逆の風聞頻。
徴見巧虚説とせば。
事の類と。特言。今年上田よ押よ。一揆よ政景
巧。
世よ。ものとて。猥よ一族巧ホ。
客易の敵ホ。
甚しきホ。長上郡鶴蛇の。
者ホ。

185

体せよと勸るものありて。幸ひ一空ぜば。予が世の御後に
なりぬべしと。不審の條々に付書付。尋常に死を命ぜんず
懐い什麼。先樂者の賢慮と云ふべし。定めて教而予
君の叡智ふかく。已に尋常に死に命ぜんとあるを幸ひ微
言呈するふ能ん乎。併あぐらく退く千意を思ひ。早く言上
仕るべしと。強密使數到り急ぎ發駕遊ばるべく。籠城退きけるが
他所にぐりせるふ。政系先月より遠例の事ありて。敵
の軍勢も出ず。領分の政勢もうつべし。兵引纒て而已
ありけるが。此の炎暑堪がたく。水辺を撰びあるひは
山莊に涼風を求めあるひは遠所に洋に聞え

きれば。定めて幼使者を以て政系が遠例を伺。將進あと終て音
信を通ずる事數度に及びしかども。政系も老實の定約予
遠例を喜ばざるゆえ懐ひ懇に而弭して。毎二の交を結ける
ふ。早三伏の夏も過ぎ。七月の中旬よりぞ。我が手に殘
暑堪がたく堪がたくなれば。定めて四月後に事有て。我領地
發駕遊の枝蹟野辺と。ひとり移りて。又使者を以て政系へ云
遣りけるは。定約が領内野辺の地の外に名ある地のいづこ
にか粗ぼ清らかなりて。人馬の慶く。水清くして顔納涼の
地ありぬべし。此越州に招請して。俗に殘暑を避の為
宴に陪せんと欲。此許客ぶりて。日と有る夜
のうちこと所廣狭とも入きれた。政系大に悦び。吉日を撰志

186

所謝し。則四所極てぞ使者を五しゝ寄る。かくて約しゝ寄る日
こもりけきび。越前守政宗宮城。右京亮義宗二男越前守
宗勝を使ひ。其外陸奥の士。上下三十餘人。て来れり。上用
の城所、左兵衛尉。屋をくよ至りれば。弓仗兵隊所守定約
自ら出て迎地迄の列莊よ備ゝて。若黒を使して賓客
馬。れ其宴所よ及ぶ。兼くゝ所ら〳〵如の樓船三艘
所ゝ〳〵。採于ゝ〳〵漕ゝ寄せさせ。ゝ渡ゝ政宗を請し
宴所自所ゝ〳〵。絶ゝ所ゝ。兼ゝ所ゝ。近習二人所ゝ〳〵て
水上よ漕ゝ出ゝ。ゝ渡ゝ義宗宗勝を迎め。陸奥の士
若干所ゝ乗て。良後まて漕ゝ出ゝ。ゝ渡の小舟ゝ乗
酒住者盛饌のゝを並ゝ〳〵。庭丁の者猶所乃士

茶及の宴数多列を。以船いゝぞゝと岸ゝ出ゝ。ゝ乗せて。ゝ出盃
乃時刻所ゝ〳〵。政宗宮城ゝ。疾中流ゝ出て。水の
仏よ流ゝ。ゝ乗ゝ〳〵。折しも涼風徐よ来ゝ。水波ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵て。主客ゝ共ゝ。ゝ楽を奏ゝ。樂娯ゝ〳〵。
時所ゝ〳〵。既よ黄昏ゝ。ゝ向ゝ。時よ夕風頻よ吹出
良波浪をあげて。水上凄ゝ。ゝ渡れば。宴所ゝ。左右人の船人
ゝ命じて。駐ゝ〳〵ゝ。船人承て。櫓ゝ〳〵ゝ
押ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ。如何ゝ。ゝ。
人水中ゝ落ゝ。ゝ。ゝ。
ゝん。水潮ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

そいで。俄に水たまりけるを。政宗が子孫。
く働くなど。人呼ぶ。
る。女人の近習。まとかけ
ふたぐりて。宮つ流川傳ふ
る。岸ふ[illegible]船の中。
政宗定紋ガ落ハ
加てども。池水くるくる
樹あく。俄よ近き村
ぞ探りあさせる。
笑ガ好付ありて。
俄ふる紋失ふ

東京都立中央図書館
137

互ひよ罵合く。主客忽紛敵とあり。板合せて戦ちんどる
あり。理を説てさゆるあり。疾上田へ告ちんと。足と空
にうけ紋を。あるひい横船の船人と吟味ぶべしせてうけ
ぶくぶくども。先よ水中よ轉くよりいふ形りし
更よ[illegible]きざりれた。何を準的とちぐき
ちくと操着す。義よ宮う佐吳ガ家老。戸股主膳と[illegible]頗
ル利くありられた。新。諸士の騒動紋ちんるより。直よ政宗ガ
子息右京亮義宗。弄平治宗勝ガ傷よゆより数で日奇代乃
変事ちくれいくども。主定紋。老年あぐる。水練を得ない。其
川特の歯。[illegible]よ食いくバ。強く政宗公を助け上中だくいくべ
先様中くいっせくきて。強くぶめ作。女人紋[illegible]

備じて。餐応ぜ。ゆ。上田の陣中まで。是
警周章して。時を移さず。狙ひける佐士。雲
霧の如しかり。水陸の者ども。政宗定め探り。
引あげ。こまでも。敵人も。組合うる。佐士。
々。是をそこく上田の佐士。佐士。政
宗公。謀り。弑さふり。主君の讐なれば。速に城を出て
城兵と鑒よせよと。一同に。拔ひきそうけいこんとなるふ。
こそ。政宗。陣門を開て。組兵
ことれば。政宗方。左右ふも。法度。齒齒ふしてぞ。
ふ。野尻ちき要害。守を。佐将芋川縫殿佐
左京進。岩井備中。言梨。政頼等。此大変を聞と等しく

進ふけ来て。先城兵と。上田扇の中ゆ断きり。双方を取あさつて
急ぎ越府へ注進さべしとて。歩ふ早る。使速ことゆ
松ゆ。ちくとかゆ。ちうて。何事ゆ変事ゆ。
民家騒を消さぐぞ狼狽を

弓佐義家断絶之事

上杉謙信。春日山を立て。野尻の大変を聞おげられ。
取敢ずんで。忽手戈ゆ。るふ至ふんとて。家老新発田因幡
守。内義豆殿助ふ内命ゆ。時を移さず越る。新発田内義
の者士。野尻の城外を出て。政宗ゆ家老栗林治郎右衛門及
佐士ふ対面して。政宗ゆ変死を悼ふ。謙信より命ゆ。佐士
不慮の死。悼ふ。弓佐義家ゆ。の儀あれども。

189

閑居。政宗ゞ子息右京亮義宗。其年伊達兵勝晃女子共
皆謙信の甥姪の事ふてあれど。年聊跡累ふべ[illegible]
謙信養子と為。右京亮を[illegible]く政宗が名跡と絶しめ家[illegible]
宮内卿参河。栗林治部右衛門を後見と定むべ紀の乃緒士務勤
あるべくこれと中沒羽上田へも使者とを[illegible]く此類とや違
又ゞ信玄の家老。曾根和泉。戸股主膳を以て後河守定
行。此度の仕合いふまでも不審ふ聞えい乃一先郡屋の城
と明渡し。退而沒法ふ乃ぶ紀退諸士本城琵琶塚く
法ぐまりゆべ紀の有中沒しきれべ政宗方。兄と先代とお
て謙信の懇命紀領掌して。義宗宗勝と守護し。政宗が[illegible]紀
と早て本城上田へと引取るゞ紀て葬式と取紀ひ紀巌寺と

ゝ移ゝ葬り。法名窓徳院近山道宗と号ス。寿秋三十九歳ゞ
と聞えし。ゞ信玄方ゞ。謙信の最命ゝ紀セ郡屋の城と紀く
新発田因幡守ゝ沒し。諸士郡屋と去て。琵琶塚乃御ふ紀任
セ。ゆくて定紀紀雲洞菴と号ふゝ義り。法名と養勇菴主良
勝後ゝと號ス。行年七十六歳と聞えし。其後定紀ゞ姉ゞ定紀
矢民部お猶勝紀紀。謙信越家へ召て。新発田道壽丸と江く
中ゞ[illegible]ゝ。後河守定紀ゞ米。此度の知紀。不屈千万ゝ対
琵琶塚の城並本領ゞ[illegible]く召あげられい也。ゝ[illegible]れい勝紀
ゞ覚悟為紀。敗而死ゞ。郡も遠慮ゝ。居城不復ゝ[illegible]
忽宰ゝの身ゝ。ゞあゝゝ

傳ゝ曰。此時ゞ信玄後河守定紀。書置の文ゝ[illegible]

其累ヨリ曰ハ度篠信公ハ政事ヨリ切腹ヲ命ジ給ヒ思召ヨリ
出ル故ヲ以テ篠信ヲ未代迄の悪名遺ス。篠信公未代迄
平上上而流ス故ニ成ル。國中大亂ヨリ及ル間不
敢とやとなく大。此承引ヲ毛利氏改系ヲ行ヒ上
上四ヶ国ヲ作ヤベル
取力級ヲ振テ。上而も毛利ヲ信リ仕方。是より
外ヨリ無ク故。朝ヨリ成果ヤ。ハ上ノ定ル秋逆の心
敬。又い遺恨ヲ意ヲ抱ヲ
京。平原不原と作生ヒて。定ル今領内ヲ上ル用
をも此類ヲ。一ヲ武勇ヲ捕彼ル。此服ヲて此迄
敬ヲ。義定ル跡月ヲ立ヲ上ヒて。上而原

意恨強ク。仕ル大亂の基ヲ。此間。罪科皆定ル今
此負下さる。是國の法ヲ以間必ヲ。定ル跡月ヲ義ヲ
絶ヒうけ原ヒ成ヒ
斯様ヲ書遣ヲ。篠信内兄ヲ。張河守半。古今稀
忠臣義士ヲ有ぞ。予命分別聞くして。幼初ヨリ半ヲ
ある忠功の志ヲ知失ひる。後悔少ヒうる。
人ヲ孫尾ヲ立ル附。十三歳の秋より。ハ張河守が怨情
所蒙り。ハ人ヲ中原英俊守が力ヲて。家運ヲ興ヲ。嗚呼
数十年の武功ヲ。ハ義の忠節。ヲ篠ヲ絶ヒる半
形ヲ半ヲ。落涙数行ヲ及ヒ。ヲ。ヲ。夫勇士ヲ
軍陣ヲ。ヲ。ヲ。ヲ。忠義ヲ。

はるかに孫後栄の為なり。然れども定綱、遠江の法名を蒙り、上洛し、跡目を継ぎ、一番の勝利、宰相と成るまで。鎌倉の外聞、然る上、本朝の忠臣なりと、古今未聞の精忠なりと、雪人感涙を流さざるといふ事なし。鎌倉も佐々木梅と成るべく、宇佐美民部少輔、密に合力有て扶持せらるべしと、宇佐美定綱が先祖と成り、抑宇佐美定綱が末裔に、頼朝公の時、宇佐美たる清門尉祐茂が末裔なり。後光厳院位宇、応安元年、上杉能憲九、越後入道の御足利氏満の命を受く。宇佐美左馬允祐益、能憲の代、越中守護して、琵琶湖の城主となり。代々琵琶湖の城主なり。定綱が父越中守孝忠、武勇の名、実に古今に聞こゆる。鎌倉が又長尾為景叛逆を企て、領上杉氏、太補房義と戦ふ。武威を震ひ、破竹の勢、是逆臣なりとも、勇威に怨恨して、進退を上る者白。独宇佐美弾正守定綱、二十一歳にして、主上杉房能の孫を守り、旧臣と成て、長尾をおびやかす。猛勇の為景を、佐渡の国より迎まくして、特勇の誉攻戦、再上杉家を起さんと、忠義を為景又佐渡より出撃す。戦ふこと、数度。宇佐美が軍、恵を奪られ、敗軍数度なりしかば、為景大よわ。上杉の城主、上杉兵部大補憲房、対峙す。宇佐美が和睦を、憲房有て、宇佐美定綱、長尾為景、遂に和睦し、のち、越後藤倉に籠城す。

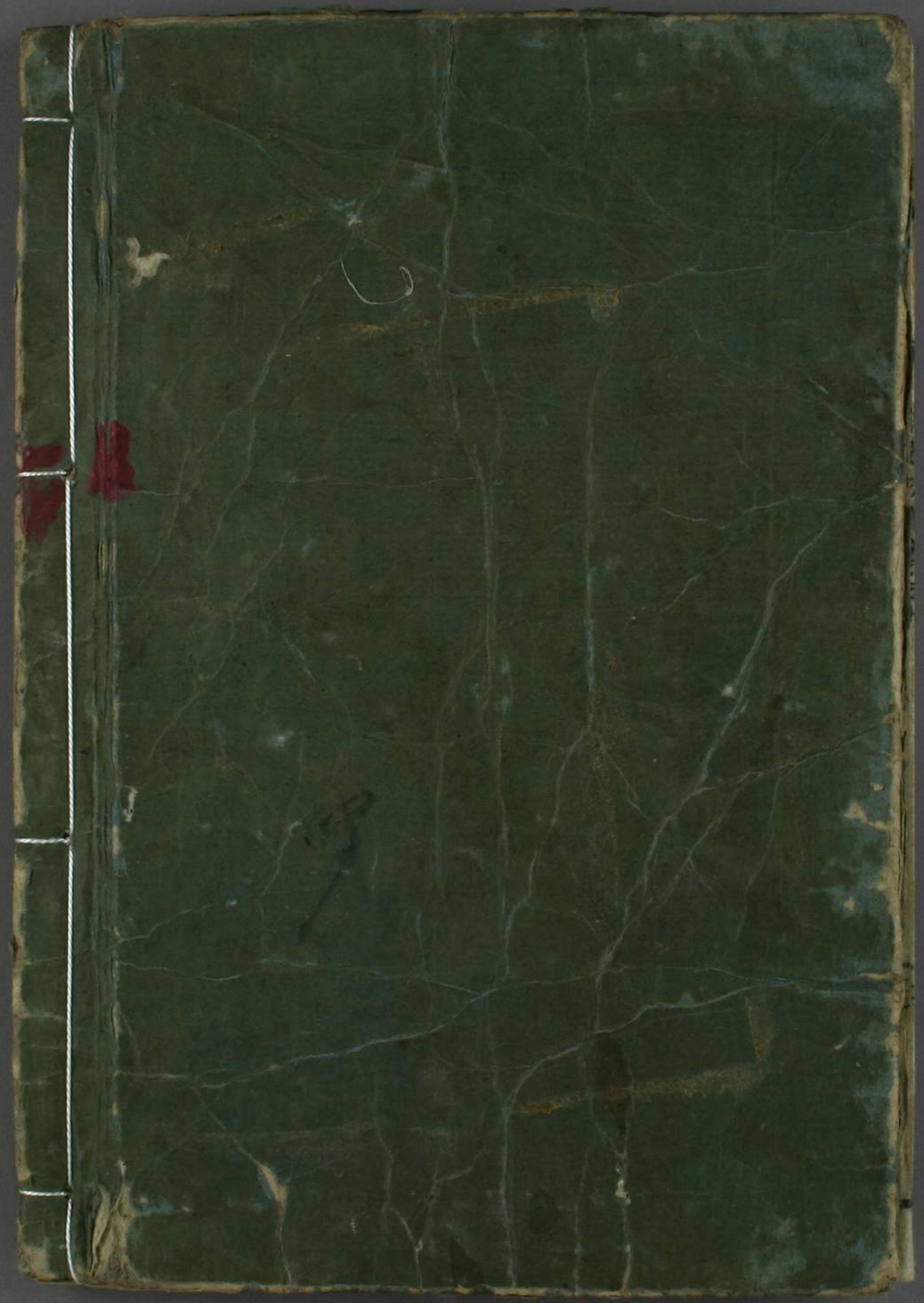
越中ふ於て。神保が為ふ討死。此時い謙信未だ平氏系尾と
号て十三歳ゟ りるゟ。又為系が讐と報利。四海一統の功をちんと
思ひ。ゟち。本庄氏能守と作ふ琵琶法ふ於て。宇佐美殿河守と
相ゝて兵法と学んと。元亨ふ於て。系尾の九郎ゟ。器量ふ感じて
家ゟ伝ふる処の。神武の大道と授。将軍職と為て謙信
と守立。ゟの戰ゟ骨と挫して。今平謙信の武威四海ふ
裏ゟ。爲呼大和武定ふ於が功。實ふ上杉輕の臣也。然
主家の怨敵ゟる逆臣為系ゟの謙信ゟ手力しく。主家と
魔ゟ勝と屋ゟ什麻ぞや。見義士乃悦ざる所ゟ。惟ふ
定ふ。謙信の聰明叡智ゟて。名将ゟる器ゟ感られ。これと助て
四海一統乃功成立しめ。裏乱の世と救。武の釜炭と救

ん。ゟて。彼西支の綜ふ拝。却而謙信ゟ絶ひ。平氏ゟ
伝ゟ軍慮ゟ心肝と摩ゟる。ゟの孫ゟ時。ゟ
齢已ゟ古稀と。ゟ。義ふ。
呂一回の為ふ。刃と水底ふ洗め。名刀奸賊ゟ隆て。自ふ
業の跡と断。
ざるべし。天若数年と加ば。年ふ。ゟの小事ゟ命と授
ん平。惜平智勇兼備の老将。其先ゟる名結益陀能
入城ゟ。以来。代ゟ武名ふ隆。今百七十年と経て忠家
一時ゟ断絶ふ及ぶ。

附曰。長尾越前守為系。主家ゟ上杉房氏と
称ゟ逆賊と震。系利の備史ふ伴れ

about

繪本烈戰功記卷之九畢

二行平

ゞ見消器平。義信も亦逆臣乃子なる所
孤さく。士匪如色戒之自跡を顧きるも
亦繁。義を以て。ふ朽ふ毛節烈を樊ず